

江戸三味線音楽の変遷

江戸の社会の変化と音楽を重ねた江戸三味線音楽史を紐解く大好評シリーズも終盤。
第七回と第八回は、嘉永4年(1851)から明治8年(1875)までの25年を2回に分けてお届けします。

第七回 美意識の発露

2018
1/25(木)
18:30開演

第八回 新時代の門口

2018
2/27(火)
18:30開演

第七回 美意識の発露

ペリーが来航する1853年前後、幕末の音楽は多くのジャンルが共存し、三味線は重要な楽器として関わり続けました。

長唄「あやめ浴衣」(1859)は、二世杵屋勝三郎と三世杵屋正治郎の合作で、同じ長唄の五世芳村伊三郎が襲名を披露する際に発表されました。着物や染物に関する言葉がたくさん詠み込まれた曲は、呉服屋のスポンサーがついたからではないかとも言われています。詞章の中で「縫れを結ぶ盃の」からは、杵屋勝三郎と芳村伊三郎の不仲、つまり糸の「縫れ」を杵屋正治郎が口をきいて和解させた(結ぶ盃)という話が残されており、最後にお家の繁栄を願う文句が唄われています。

同じ年に作曲された清元「梅柳中宵月(十六夜)」(1859)は、市村座で「小袖曾我薊色縫」の中で初演されました。「十六夜」は女主人公の名前で、男主人公の名の「清心」と言われることもあり、鎌倉極楽寺の所化(修行僧)清心と大磯の遊女十六夜の心中道行(心中におもむく男女の心情を、目的

への途上の景色を織込んで表現したものです。

常磐津「勢獅子劇場花骨(勢獅子)」(1851)も中村座で「世界花小栗外伝」で上演されました。謡曲「石橋」からきていますが、手古舞(山王祭や神田祭

常磐津「勢獅子劇場花骨(勢獅子)」

等で山車を警護した鳶職(こと)の獅子頭など江戸の粋な祭礼風俗を見せています。

第八回 新時代の門口

開国を契機に西洋音楽が流入してき

ますが、一部の音楽を除いて三味線音楽に西洋音楽の影響はまだ及びません。

清元「貸浴衣汗雷(夕立)」

(1865)は、市村座「処女評判善悪鏡」の奥

女中になりすました女盗賊のお熊が道中雷雨に遭い、そこで出会った男をたぶらかそうとする

場面 で用いられました。通称「お熊」とも言われます。今では踊りで取り上げら

れることが多く、叙情性と美しい景色を織り込んだ作品です。

義太夫「壺坂観音靈験記」(1879)は少し時代を先取りしますが、盲目の沢市につくす女房お里の信仰心により観音の靈験があらたかになる、明治期に書かれた新作の中でも人気の高い作品です。

江戸三味線音楽なのに義太夫がなぜ入っているのか、と思われるかもしれませんが、義太夫は上方の三味線としてこれまでシリーズでは扱ってきませんでした。しかし、江戸でももちろん義太夫は聴かれてきました。特に女流義太夫は江戸の地で盛り上がりを見せた芸能です。

長唄「渡辺綱館之段(綱館)」

(1869)は寛保元年(1741)に中村座で初演された大薩摩節(勇壮豪快な曲調で、歌舞伎の伴奏音楽。現在は長唄に吸収)を五世杵屋勘五郎が復曲した代表的な大薩摩風長唄です。叔母に化けた茨木童子が物忌み中の渡辺綱を尋ね来て、斬り取られた腕を取り返すという内容をドラマチックに唄いあげます。

第九回 文明開化到来
2018 4/26(金) 18:30開演

第十回 暗中模索からの脱却
2018 5/28(日) 18:30開演

まだまだ江戸は終わらない!

年号が変わっても人々の意識がすぐ切り替わるわけではありません。江戸は明治に入ってもまだ密やかに色濃く存在を残していました。シリーズは1900年までをたどります。



極楽寺清心・扇屋抱十六夜[豊国]国会図書館蔵